

小学校3年生社会科における

地域社会への関わりの素地を育成するための授業改善

江畑 正平 (教育実践コース)

1 課題意識と研究の目的

社会科の目標である「公民的資質の基礎を育成する」とは、学んだことを地域社会や他の学習場面で活用できる力を育むことだと言える。そのためには、「〇〇が分かった」という単純な知識の増加ではなく、「今度は〇〇をもっと調べてみたい。」「地域の〇〇をよく知りたくなった。」のような「地域への関わりの素地 (以下「素地」と表記)」が育成される授業を目指す必要がある。

しかし、これまでの筆者の授業では、町探検や施設の見学など直接現地で学ぶ機会を多く設定しても、子どもが主体的に地域に関わっていこうとする姿は希薄であった。

そこで、「素地」の育成を目的として、下記2点を視点とし、単元・授業を設計し、実践・分析を行い、授業改善に取り組むことにした。

視点①: 「素地」を構成する要素

視点②: 「素地」を育成するための手立て

なお本研究では、小学校3年生に焦点をあてる。それは、社会認識形成の入門期である3年生としての「素地」の育成が社会科学学習にとって重要と考えるからである。

2 知識の活用に焦点を当てた単元設計「工場ではたらく人と仕事」(1年目後期)

(1) 「素地」が育成された姿

社会認識の形成過程には「関心・参加」「協同」「持続性」が関連する(佐島, 1992)。この視点から現行の学習指導要領を考察し、「素地」が育成された子どもの姿を下記のように仮定した。

ア これから調べたいことや知りたいことを明確にしている姿(関心)

イ 学んだことを活かし、地域社会・実生活においてできそうなことを考えている姿(参加・協同)

ウ 学習内容について、継続的あるいは授業以外でも追究しようとしている姿(持続性)

(2) 「素地」を構成する要素

これまでの授業では、課題解決のための知識の構成が不十分であり、また既習内容の活用方法が身に付いていない点に課題があった。そのため本実践では、「学んだことが自分たちの身近な場面(実生活や地域)とつながっていることの認識」に焦点をあてた。それによって、当事者意識をもって考えたり、地域に見られる課題を解決したりするという意識の高まりを期待した。

- ・活用可能な知識
- ・当事者意識

(3) 単元の設計

地域社会にみられる課題解決に向け、当事者意識をもって自分の考えを構成するという視点から単元を設計する。粕谷(2024)は、子どもが実際に社会に働きかけるための単元設計の視点として、「地域の課題を知り、課題解決のための自分の考えをもつ」、「解決に向けた実際の取組を知る」、「自分と実際に取り組んでいる方、両方の立場を関連付けて考えること」の重要性を述べている。これを基に、本単元を①現状の課題把握、②課題解決のために自分ができそうなことの思考、③実際の課題解決の視点の構成、④協力・連携してできそうなことについての思考、の4段階で構成する。

(4) 単元計画: 五泉ニットに関わる人々～五泉ニットを盛り上げよう(2次構成の単元の2次)

五泉ニットの魅力を宣伝する方々の工夫や努力に重点を置き、下記のように単元を構成した。

・1時間目「現状の課題把握」: ニット工場の方々の、「もっと五泉ニットを盛り上げたい」という願いを知り、課題を設定する。

・2時間目「課題解決のために自分ができそうなことの思考」: 副読本を参考に、解決のためにできそうなことを考える。【具体的な考え・思い、当事者意識をもつ】

・3時間目「実際の課題解決の視点の構成」: A施設の見学に行き、五泉ニット協同組合の取組について調べる。【中心概念を形成する】

・4時間目「協力・連携してできそうなことについての思考」: 五泉ニットを盛り上げるために、自分たちにもできそうなことを選択・判断する。【活用可能な知識を構成する】

(5) 実践の概要

- ・対象: 新潟県公立小学校3年生(20名)
- ・期間: 2024年11月14日(木)～29日(金)
- ・分析対象データ: 抽出児のノート、発話データ、ビデオでの授業記録(1台で教室後方から撮影)、板書記録、ノートへの記述。

(6) 授業の実際

①課題解決のために、自分ができそうなことを考える段階(2時間目)

五泉ニットを宣伝するA施設について副読本で確認した。その後、教師が「五泉ニットを盛り上げるために、自分たちにどんなことができそうかな」と発問をし、子どもからは「ポスターを作る」「動画を作る」などの発言があった。その後、「イベントを開く」という考えが共有された。イベントの内容について、「自分で作って着てみる」「図案を考えてみる」などの案が出た。抽出児は、「ポスターをはったりちらしを配ったりできると思った。自分たちもど

こかと協力すれば、五泉ニットを今よりすごくできると思った。五泉ニットをもっと知ってほしくなった。」と、振り返りに記述した。

②地域の方々と協力・連携して、自分たちができそうなことを考える段階（4時間目）

教師が「見学したことをもとに、五泉ニットを盛り上げるために何ができそうか」と発問した。全体検討では、「イベントをしたらいい」「ポスターを作る」などの考えに加えて、「協力したらできそう」「協力したらいい」などの発言が出た。抽出児は、「イベントを増やせばいいと思った。イベントでニットを作れば、いろいろな人がきて五泉ニットを有名にできると思った。工場やA施設と協力して、五泉ニットをもっと有名にしたい。」と、振り返りに記述した。

(7) 分析方法

本実践において規定した「素地」が育成された姿と、本単元での焦点「当事者意識（具体的な取組についての記述）」「活用可能な知識の構成（中心概念と取組が関連付いた記述）」という観点から分析する。

(8) 分析結果

「当事者意識」について、授業終末の「盛り上げるための考え」を書けたかを分析すると、2時間目は18名、4時間目は20名が考えを記述できていた。

「活用可能な知識の構成」について、4時間目にA施設や五泉市と協力・連携した取組を考えた子どもは、4名であった。

このことから、本実践で規定した「素地」が育成された子どもは4名と言える。

(9) 考察

「五泉ニットを盛り上げるための取組」について、20名全員が考えを書いた。しかし、内容を見ると、A施設や市と協力・連携するという発想に至らず、自分でポスターや動画を作るといった、個人の取組に限定されていたり、思い付きで実現可能性がなかったりする記述が16名であった。一方、抽出児は、2時間目の時点で、A施設の取組の意味を理解し、協力したらいいという考えをもつことができた。この抽出児を含め、「素地」が育成されたと判断できる子どもは4名であった。

次の2点が今後の課題である。1点目は、五泉ニットを盛り上げたいという、問いの醸成が不十分だったことである。2点目は、概念形成が不十分であったことである。「素地」が育成されたと判断できる子どもが、わずか4名であったのは、残る16名は問いをもてず、自分たちが何のために取り組んでいるのかという意識が希薄だったからと考える。A施設の役割・意義についての概念形成ができないまま、自分がしたいことだけを述べている状態であった。見学や調査活動から得た具体的知識を関連付け総合し、概念を形成する手立てを講じる必要がある。

3 概念形成に焦点を当てた単元設計「まちの様子」 (2年目前期)

(1) 「素地」を構成する要素

1年目の実践・研究から、概念形成の重要性が見出せた。既習の知識を関連付けて構造化することで、概念が形成され、調べたいことや、知りたいことが明確になり、地域社会において、できそうなことが考えられるようになると想定する。

・既習知識が関連付いた概念

(2) 概念形成のための手立て

概念形成を視点に、「まちの様子」の単元を構想する。山田(2012)は、地域社会に見られる課題解決のため、課題や現状、原因などの社会的事象を構造的に理解すること、つまり概念形成の重要性を述べている。それに基づき、次の2つの手立てを位置付ける。①既習知識とのずれから問いを醸成する。

②具体と抽象を往還し概念を形成する。

これによって、課題が明確になるとともに、具体的知識から概念を形成できると考え、単元「もっと知りたい、私たちの校区」を設計した。

(3) 単元計画：もっと知りたい！自分たちの校区

本単元は、2次で構成されている。1次は、8時間で構成する。その中で小学校の周囲、東西南北を4時間かけて歩き、「小学校の周りは、東西南北でけっこう違う」という概念を形成する。2次では、調査範囲を広げ、校区の東西南北の端の様子を捉えることで、「地域全体の様子は、東西南北で違っている」という概念を形成する。計画は以下の通りである。

・1時間目：これまでの学習を振り返り、2次の学習課題「校区全体の様子を調べよう」を設定する。(①既習知識とのずれを生み、問いを醸成する。)

・2時間目：校区の東西南北の端がどうなっているかを予想し、見学の視点をもつ。

・3・4時間目：町探検で、東西南北の端の様子を調査する。

・5時間目：町探検の気づきを振り返り、校区の特色を捉える。(②具体と抽象を往還し、概念形成をする。)

・6時間目：校区のことを紹介するポスターを作る。

(4) 実践の概要

・対象：新潟県公立小学校3年生(18名)

・期間：2025年5月16日(金)～6月16日(月)

・分析対象データ：抽出児のノート、発話データ、ビデオでの授業撮影(1台で教室後方から撮影)、板書記録、ノートへの記述。

(5) 授業の実際

①既習知識とのずれを生む場面(1時間目)

教師が「学校の周りを歩いてみてどうだったか」と発問すると、「かなり歩いた」「4時間もかかった」などの反応があり、「広い範囲を歩いた」ことを共有した。その後、教師が五泉市全体の地図を提示し、歩いた範囲を示した。すると、子どもから「えっ」「たったこれだけなの」というつぶやきや、「もっといろいろなところを調べたい」という声が挙がり、「校区全体」などの考えが出され、「校区全体につい

て調べる」という課題が共有された。抽出児は、「小学校の周りは、東西南北でちがいました。学校のまわりをあんなに歩いたつもりだったのに、ほんの一部だったのがびっくりしました。地域全体や五泉市全体だともっとちがうと思います。」と振り返りを記述した。

②具体と抽象の往還（5時間目）

町探検でどのような気付きがあったのかを、教師が子どもの発言を基に、方位ごとに黒板で整理した。

「西は川が近くで、車がたくさん通っている」「北は田んぼが多い、山が近い」「南は田んぼが広がっている」「東は大きな川が流れていて、山が近い。温泉旅館がたくさんある」といった気付きが挙がった。気付きが整理された後、「東西南北について、どんなことが言えるか」と発問した。子どもは、「目立つ物や多い物が違う」「東西南北で全然様子が違う」といった各方位の様子をまとめていった。

抽出児は、「今日は、校区がどんな様子が学びました。けつろん校区の様子は東西南北でちがいました。例えば、西は早出川があって、太川橋がかかっています。ふつう車の通りがすごく多いです。北は、西よりも田んぼが多くて、山が近いし、早出川がつながっています。今度は、お店や工場があるところはどこか調べたいです。」と振り返りに記述した。

(6) 分析方法

「課題設定」と「具体と抽象の往還」という視点から、それらが「素地」の構成要素とどうつながるのかを分析する。

(7) 分析結果

①既存の知識とのずれを生み出す場面設定

子どもへの直接の聞き取りから、17/18名が町探検に出かけ、実際に調べたいという考えをもった。

②具体と抽象の往還

上述の抽出児の記述は、概念を具体的な事実を根拠として説明している。それと同様の記述は13/18名であった。具体的事実を根拠として説明ができた13名は、調べたいこと、考えたいことをもつことができ、「素地」が育成されたと判断する。

十分な説明ではなかった5名は、東西南北の具体的な違いについて、明確に捉えられていなかった。

(8) 考察

2つの手立てに対する分析結果から、次の2点の重要性が示唆される。

1点目は、既有知識とずれを生む教材の提示が、子どもに問いを生み、具体的事実に着目する機会を与えることである。2点目は、具体的な事実がつながり、抽象的な概念を形成しうることである。町探検での具体的な気付きを方位ごとに整理し、特徴付けること（抽象）で、概念が形成できたと考える。

一方、十分な説明ができなかった5人の姿から、具体的事実と結び付けながら中心概念を形成していくための手立てを明らかにすることが課題として残った。

4 問いの醸成と概念形成に焦点を当てた単元・授業設計「工場ではたらく人と仕事」（2年目後期）

(1) 「素地」を構成する要素

前期実践と同様に、概念の形成に着目し、具体的事実のつながりを重視するが、課題として残った中心概念の形成のために、より具体と抽象のつながりを意識する。

- ・問いに基づく具体的事実
- ・具体的事実に基づく中心概念

(2) 単元及び授業設計の視点

「素地」を育成するための本単元の手立てとして、「①既習知識とのずれから問いを醸成すること」「②具体的事実から中心概念を形成すること」を位置付ける。なお、単元の構成は、前年度と同様であるが、「問い」と「中心概念の形成」に着目している点に質的な違いがある。

(3) 実践の概要

- ・対象：新潟県公立小学校3年生（18名）
- ・期間：2025年10月22日（水）～12月22日（月）
- ・分析対象データ：抽出児のノート、発話データ、ビデオでの授業記録（1台で教室後方から撮影）、板書記録、ノートへの記述。

(4) 授業の実際

① 既習知識とのずれを生む場面

ア 単元全体の問いの構成場面（1時間目）

1学期の校外学習の写真を教師が提示し、子どもは学習したことを振り返り、市長や、市の施設が五泉ニットを推していたことを確認した。その後、教師が五泉ニットの生産高が全国一であることを伝え、「五泉ニットを市全体で推しているのは、たくさん作っているだけが理由なのかな」と発問した。子どもから、「それだけではない気がする」「でも、それが何なのかが分からない」などの反応が挙がり、問いが醸成されていった。

イ 1時間での問いの構成場面（事例として6時間目）

見学を訪れた工場では、1日約180枚のニット製品を作っていることを確認した。その後教師が、全国的に有名なY社では、1日に1000枚のニット製品を作っていること、見学を訪れた工場では「もっと作れるが、作らない」ということを伝えた。子どもからは、「えー」という驚きの声が挙がった。「なぜだろう」「大量に作ったら置き場所がないのかな」など、予想を始めた。

② 具体的事実から概念を形成する場面

ア 単元のまとめの場面（11時間目）

A施設がニットと関係なさそうなことを多くしている理由を考えた。施設で実際に行われていることを基に、「まずは来てもらって、楽しさを知ってほしい」、「来てもらえば、ニットのよさを知ってもらえる」などの意見が出た。また、「B施設と協力してイベントをしている」といった意見が出され、「自分たちにも何かできそう」という発言があった。

イ 1時間のまとめの場面(事例として6時間目)

「様々な理由をまとめると、どのようなことが言えるか」と発問した。「丁寧に」「お客様のことを考えて」などの考えが出された。「使う人のことを考え、時間や手間をかけてこだわりをもって作っていること」と、子どもの考えをつなげてまとめとした。抽出児は、「日本一のニットじゃなくなるから200枚作れるけど作らない。時間をかけて、ていねいに作る。とくに風合い出しにこだわっていた。他のお店はどうか調べたい(抜粋)」と記述した。

③ 活用場面

ア 解決策を考える場面(2次:2時間構成の2時間目)

教師が「五泉ニットの魅力を知ってもらうためにどうしたらよいか」と発問すると、「ポスターを作る」「動画を作る」といった個の取組に関する意見が出た。その後、「もっと多くの人に五泉ニットの魅力を知ってもらうためにどうしたらよいか」と発問すると、市長と協力したい」「見学に行ったB施設と協力したい」「施設と協力したイベントができるのではないかなど、連携・協力といった視点から考えた意見が挙がった。

イ 魅力を考え、共有する場面(8時間目)

教師が、「見学先以外の工場について調べよう」と発問した。子どもは、自分が興味をもった工場について、インターネットを利用して調査活動を行った。調べたことについて発表する場面では、それぞれの工場にこだわっていることや、得意なことがあり、それが五泉ニットの魅力につながっていることが共有された。

(5) 分析方法

本単元の手立てである「既習知識とのずれから問いを醸成すること」「具体的事実から中心概念を形成すること」により、「素地」が育成されたか否かを授業記録や授業外での子どもの追究の姿から分析する。

(6) 分析結果

① 問いの醸成

単元全体の問いを構成する場面では、17/18名がこれから調べたいことを記述した。また、事例授業では、17/18名が予想を記述した。

② 中心概念の形成

事例授業では、具体的事実をもとに、「大量生産ではなく、丁寧に作っている」ことを記述できた子どもは14名であった。他の子どもは、具体的事実を述べているだけであった。

単元のまとめの場面では、具体的事実をもとに、「五泉ニットの魅力を伝えるために、様々な人とつながろうとしている」記述ができ、概念形成ができた子どもは15名であった。

③ 活用及び「素地」

「それぞれの工場のこだわりや頑張りが、五泉ニットの魅力につながっている」といった具体的事実を結び付けた記述ができた子どもは15名であった。

また、「五泉ニットの魅力を伝えるためにA施設や市と連携・協力したい」「自分もできることをしたい」など、学んだことを活かし地域社会でできそうなことを記述した子どもは15名であった。

(5) 考察

本実践において、以下のような「素地」が育成されたと考えられる姿が見られた。

- ・予想したり、見学で自主的にインタビューしたりする姿
- ・自主学习で見学先以外の工場やA施設のことを、家族に聞いたりインターネットで調べたりする姿
- ・五泉市を訪れた観光客に、五泉ニットのよさや魅力を伝えるためのポスターを実際に作りたいと発言する姿

これらの姿は、昨年度の実践中・実践後には見られなかった。また、ポスターについても、伝えたい内容が明確になり、実際に作ったことが昨年度とは異なる点である。

昨年度と比較すると、素地が育成されたと考えられる子どもは4/20名から、15/18名となっており、割合が63ポイント上昇している。子どもが問いをもつこと、そして中心概念が形成できることは、「素地」の育成に効果的に働いたと考える。

5 総合考察

(1) 本研究の成果

視点1:「素地」を構成する要素

問いという文脈とともに、具体的事実を理解すること、さらに具体的事実を関連付け、抽象化することで形成された中心概念が、「素地」を構成するための要素と言える。それらによって、地域へ主体的に働きかける姿につながった。

視点2:「素地」を育成する手立て

「問い」によって具体的事実が文脈とともに理解される。本研究では、既習知識とのずれによって、「なぜ」「どうしたら」という問いが醸成された。その解決に向かう過程で、見方・考え方を働かせて、知識と知識が結びつき中心概念が形成された。

(2) 今後の課題

本研究は3年生の地域単元に焦点化されている。したがって、他学年や他単元での単元・授業の設計・実践・分析が今後の課題である。

<引用参考文献>

粕谷昌良(2024)「公民的資質の育成にかかわる当事者性の考察～小学校3年生、5年生の実践と省察を通して～」, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』152, pp.44 - 57.

佐島郡巳(1992)『新社会科授業論』, 教育出版

山田秀和(2021)「知識の成長」を中核にした小学校社会科の授業デザイン～「問題解決的な学習」の実質化のために～」, 唐木清志(編)『社会科の「問題解決的な学習」とは何か』pp.36 - 45, 東洋館出版